

葵の祈禱所

紀伊徳川家と高尾山

明治大学博物館 外山 徹

16

薬王院上京―秀興権僧正補任

安永元年（二七七二）の暮れ、江戸の紀伊徳川家屋敷を訪れた山主秀興は、八千枚護摩供と星



秀興の上京に際し、祈禱料・供物料について照会する浅井庄左衛門の書状

い折柄のことである。重ねての書状到来 明けてその年の三月ともなると当時としては晩春の時節だが、再び書状の往来が繁くなる。写真の書状は三月九日付でやはり紀州家臣浅井庄左衛門から到来したものである。その前半部分について解読文を掲げよう。

昨日者御出之処不得御意御然多存候御堅固之旨珍重之御事御座候然者貴院此度御上京二付所々御参詣御祈禱之儀二付供物料且御祈禱料与も先例之通被遣候品二候哉二付御紙面之趣致承知候

（後略）

この現代語訳は次の通りとなる。昨日は御出でのところ、お話を伺いすることができず残念でした。いよいよ御堅固とのこと、珍

重の事にございます。しかるは、貴院がこの度御上京になり所々へ参詣され、祈禱をされることから、供物料また御祈禱料とも先例の通りお遣わしく下さるかとの紙面の趣は承知いたしました。

（後略）

解読文の二行目にある「然」は史料集でも「残」の誤字と解釈されている。冒頭の「昨日は御出でのところ」の解釈は「御意」の主を書状の宛所である薬王院秀興と考えれば、やはり前年末と同様に紀州藩邸を訪れており、たまたま浅井とは顔を合わせる機会が無かったという解釈になる。そして、「御上京」は当時であるから京都のことである。これについて、紀州家から「供物料・御祈禱料」を「遣わす」ということはどういふことか。浅井に面会できなかった秀興は、それを伺う書面を置いて退出したということ

のようである。

実はすでに三日付で、当月ご上京の節道中筋寺社・洛中洛外近国寺社へご順行の節、紀伊殿所労快然の御祈禱、所々にてご執行ならるべき哉の儀取り計らいに及びそうろうという書面が届いていた。すなわち、上京の折、紀州家当主重倫の病氣快然の祈禱をおこなうかという照会があり、その対応を協議しているということである。京都には寺社仏閣がたくさんあるので巡拝して重倫の病氣快然を祈禱するという趣旨である。江戸から高尾への路程から、この書状は五日には薬王院へ届いたのであるから、それを承けて秀興が急ぎ紀州藩邸を訪れたということかもしれない。

冒頭の書面の続きには、同様のケースについて先例はどうなっているか連絡がほしい、また出立の日取りについての問い合わせの記事がある。そして、

翌二〇日に追伸として、お報せ申し進りそうろう通り、使いの者差し進りそうろう間、委細お書付この者へお差し越しならせそうろうよう、いたしたくそうろう

と、供物料・祈禱料の詳細については、そのまま使者に返答書を預けるよう重ねて念を押している。出立の日取りが不明な以上、間に合わせる必要はあるにしても、この一言のために別の使者を立てねばならないわけ、この件については余程細心な配慮をしていたことが感じられる。

当時としてはより上位の神仏にはより強い威力があると考えられていたから、この上京という機会は滅多にないことである。秀興としては重倫の病氣快然には格好の機会と考えたのであろうし、紀州家側も同様と考えてあったようだ。前号でも述べた通り、薬王院文書に含まれる書

状類は、実際にその当時やり取りされたものである。一日遅れで念押しした書状が発せられるなど、人々の動作の生き生きとした様を実感することができる。

上京の理由

しからは何ゆえに秀興は京都へ行ったのか？ 後の紀州家との関係を記した由緒書には、「権僧正宣下上京つかまつりそうろう」と、この時の理由を記してある。後世の記録ではあるが、実際、秀興は歴代山主よりも上位の権僧正の僧官を得ており、その記憶は後世に伝えられるに充分な印象であるうし、実際、この時期に拝任したものと見ても妥当であろう。僧官（現在は僧階）と

大覚寺は嵯峨天皇の離宮を貞観二八年（八七六）に皇女正子内親王が寺院とし、創建された。大覚寺へ住職を出した皇統を大覚寺統と呼び、後醍醐天皇の南朝へ連なる皇統として知られる。応仁の乱で焼失した後、信長・秀吉の寄進で再興された。

大覚寺の院室の院主は地方の寺院が兼帯しており、安政三年（一八五六）の段階で二四の院室が江戸・武蔵国の寺院によって兼帯されていたが、兼帯の寺院は近畿や九州まで幅広く分布した。特に関東の寺院の院室兼帯が一八世紀後半に集中して見られることから、門跡寺院の財政と権威浸透を意図する動きの中で大覚寺側からのものではなにかがあったのではないかと推定されている。背景には幕府に対する朝廷の権威上昇も指摘される。一方、兼帯寺院にとってのメリットは名実ともに寺院としての格式の上昇

である。門跡寺院の院室兼帯は色衣着用許可の条件にも加えられており、大覚寺門主の相続儀礼や年頭儀礼など特別な儀式へも参列することになる。こうした一八世紀後半における寺格上昇と寺勢興隆の背景には紀州家の帰依があったと言える。紀州家との関わりを記した由緒書には、補任にあつたの上京に際し「諸社へ御祈念申し上げべき旨仰せ付けられ、用意金として金二百両頂戴」とある。

【参考文献】村山正栄編『智積院史』（一九三四）、岩橋清美「高尾山薬王院と大覚寺門跡」（『近世高尾山史の研究』雄山閣出版、一九九八）、高橋秀慧「近世新義真言宗の官位に関する基礎的研究―一能化の官位を中心に―」（『現代密教』二〇、二〇〇九）
おことわり 本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。